○東北大学ヤナギ園栽植外国産ヤナギの新和名（木村有香） Arika KIMURA: Nova nomina japonica *Salicum* exoticarum in Salicto Tôhoku Universitatis cultarum

東北大学理学部附属植物園内のヤナギ園には外国産のヤナギの多くの種類が栽植されている。これらは1953年春スウェーデンのエーテボリ植物園から主にヨーロッパ産の種類をもらったのが最初で，その後ヨーロッパと南北アメリカのあちこちから送られたものが多数加わった。今やこれらのヤナギの形質に関する私の観察も次第に積み重なり，理解も段々深まってきた。近頃それらに和名が欲しいとの要望があるので，その内の有名なものに新しく和名をつけてみた。以下学名をアルファベット順にならべ，各々に新和名を附記した。* 印をつけたのは原始的なヤナギ類すなわちマルバヤナギ亜属 *Salix* subgen. *Protitea* Kimura (20 Maii 1928) に属するものである。この亜属 *Protitea* は *Salix* subgen. *Pleiolepis* Nakai (autumno 1928) と全く同じものであるが，後者は発表された Bull. Soc. Dendr. France, No. 66 (1928) が当時フランスの印刷工場のサボタージュのため発行がおくれ，*Protitea* Kimura より約4ケ月おそく同年秋になって出版発行された。

Salix acutifolia Willdenow	カスピエゾヤナギ
S. aegyptiaca L.	ペルシァバッコヤナギ
S. alba L.	セイヨウシロヤナギ
S. amygdaloides Andersson*	アメリカマルバヤナギ
S. aurita L.	ユスラバヤナギ
S. Bonplandiana Kunth*	ボンプランヤナギ
S. Caprea L.	セイヨウヤマネコヤナギ
S. × *chrysocoma* Dode	コガネシダレ
S. daphnoides Villars	セイヨウエゾヤナギ
S. fragilis L.	ポッキリヤナギ
S. glabra Scopoli	セイヨウミヤマヤナギ
S. nigra Marshall*	アメリカポッキリヤナギ
S. pentandra L.	セイヨウテリハヤナギ
S. purpurea L.	セイヨウコリヤナギ
S. Safsaf Forskål*	サフサフヤナギ
S. silesiaca Willdenow	シレシアヤナギ
S. tetrasperma Roxburgh*	テンジクヤナギ
S. triandra L.	セイヨウタチヤナギ
S. viminalis L.	セイヨウキヌヤナギ

次に新和名の若干につきその由来を簡単に説明したい。*Salix acutifolia* Wil-

ldenow はエゾヤナギ節の1種で，カスピ海の北岸地帯に分布するのでカスピエゾヤナギとした。*S. aegyptiaca* L. はわがバッコヤナギに近いものであるが，エジプトには野生はない。分布の中心地はイランであるので上記の名を下した。*S. amygdaloides* Andersson は北米の特産で，わがマルバヤナギの幼木や若木の葉に似た葉をもち，同じくマルバヤナギ亜属に属する。*S. aurita* L. は葉が小さく倒卵形で一寸ユスラウメの葉を想わすのでユスラバヤナギと命名した。*S.* × *chrysocoma* Dode は枝のしだれた容姿まことにうるわしいヤナギで，冬期葉のない時小枝が美しい黄色を呈しているのでコガネシダレとした。英名 Golden Weeping Willow。*S. fragilis* L. は小枝が外力によりポキッと音をたてて容易に基部から折れるのでポッキリヤナギと名付けた。独名 Knack-Weide, 英名 Crack Willow，ともに折れる時の音をあらわす。*S. glabra* Scopoli はかつてわがミヤマヤナギ *S. Reinii* Fr. & Sav. をこれにあてたことがあったが，互によく似ている。*S. nigra* Marshall は北米の特産でマルバヤナギ亜属の世界における分布北限を代表するものであるが，小枝が特に基部から折れやすいので上記の名を与えた。*S. tetrasperma* Roxburgh は分布の中心地印度をとってテンジクヤナギとしたが，英名も Indian Willow である。 (仙台市[redacted])

○ヌスビトハギ（広義）の白花3品種（大橋広好） Hiroyoshi Ohashi: White-flowered forms of *Desmodium podocarpum* DC. (Leguminosae)

ヌスビトハギ，マルバヌスビトハギ，ケヤブハギは非常に近縁で形態的によく似ており，ときに互いの間で誤って同定されている。最も安定した相違点は頂小葉の形，次は豆果の柄（子房の柄）の長さであり，この2つの形質を組み合わせて同定できればまず間違いは少ない。しかし稀にそれぞれの中間的な個体もある。以前，アジアのヌスビトハギとその近縁属構成種を調べた結果，これらを1種にまとめ，その中で亜種レベルで区別する新見解を発表した。学名の変更は Flora of Eastern Himalaya 第2報 (1971) 中で行ったが，それぞれの変異，区別点などについては Ginkgoana No. 1 (1973) の中で述べた。命名規約上 *Desmodium podocarpum* DC. を母種としなければならないため，和名になおすとヌスビトハギがマルバヌスビトハギの亜種という形になってしまう。これはわれわれの理解と矛盾するので，和名を亜種のランクで学名に対応させ，*D. podocarpum* DC. を広義のヌスビトハギと呼ぶことにしたい。

広義のヌスビトハギに属する白花品として，従来シロバナヌスビトハギ，オキチハギ，シロバナケヤブハギが記録されている。オキチハギは下田で発見され，唐人お吉にちなんで命名されたもので，旗弁と翼弁が純白で竜骨弁が紅色という形である。ヌスビトハギとマルバヌスビトハギの原記載では花色に関する記載はなく，ケヤブハギの原記載では淡紅紫色または白色であることが明記されている。前の2亜種はネパール産の標本がタイプであるが，ネパールでもヒマラヤでもまだ白花品の記録はない。